

---

# 無音空耳狂想曲をバケツを被った猫に捧げる

金糸雀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無音空耳狂想曲をバケツを被った猫に捧げる

### 【Nコード】

N1333X

### 【作者名】

金糸雀

### 【あらすじ】

「煩いのは嫌いです。」

下校中、狩屋マサキは、先輩である霧野蘭丸にシードであることを問いただされていた。

それを煩く感じた狩屋は軽くからかって黙らせようと思い、実行に移す。

それが始まりだった。

## くプロローグく (前書き)

うん、ちょっとそこら辺で金糸雀ワールド炸裂してくる。

多分、短いと思う。

思いたい。

マサキ君は本当は良い子なんだよ！

ただ・・・ほんのちょっと、意地悪なだけなんだ！！

なんか、マサキ君には猫かぶりって言葉がぴったりの気がするの。

だから、タイトルが猫なんだと思う。

・・・まあ、霧野の方が断然良い子だけどねっ！！！！

♪プロローグ♪

—— 多分、それは夢だった。

「  
~~~~~  
♪~~~~  
♪」

イヤホンから流れる最近流行りの音楽。

暖かく無ければ、冷たくも無い。

それは俺に取って、シンバルを叩くサルの煩い玩具くらい、全く価値の無い、不愉快な物であった。

でも、このイヤホンを外せば、それ以上に耳障りな「音楽」が聞こえてくるから仕方無い。

ケータイをカバンから取り出し、スライドさせ、松風君からのメールの返信を素早く打つ。

曲と曲の境目。

イヤホンの音が止み、外の音が少しだけ聞こえる。

「答える！・・・お前、雷門をどうするつもりなんだ！！・・・  
大体――」

次の曲が始まり、雑音が雑音に掻き消される。

あー、耳障り。

「・・・・・・・・・・！！？・・・・ッ・・・・・・・・・・」

それでも微かに聞こえてくる「音楽」。

仕方なく、片耳からイヤホンを外し、ケータイをズボンのポケットに入れ、音源である「彼」に振り向く。

「先輩、煩いです。」

「……………なッ!?……………煩いつて……………ふざけるなッ!……………俺は真剣に……………」

あ、ポリウム上がっちゃった。

どうすれば止められるかな……………

「……………そうですよ、キャプテンはどうしたんですか?……………あ、先輩があまりにもうざいから愛想つかされちゃったんですか?」

「……………ッ……………テメエ……………!?!?」

海色の目が一層、怒りに燃え上がる。

あー、こんなのに支えられてるキャプテンが哀れに思えてきた。

「それ以上、俺に付きまとして騒ぐなら保健所で処分してもらいますよ？」

「誰が保健所だッ!!」

「あ、先輩、人間でしたっけ？」

「……狩屋あ……ッ……!!!!」

先輩の腕が俺の学ランの襟に伸びる。

「お前、人を馬鹿にして何が楽しいんだッ……!!!!」

「何、一人でムキになってるんですか？馬鹿みたい。」

「・・・・・・・・ッ・・・・・・・・!!!!」

襟を掴んでいない方の腕が、俺に殴りかかろうとする。

「・・・・・・・・何してるんだ、霧野。」

そこに現れるピンチヒッター。

「・・・・・・・・神童・・・・・・・・」

先輩の腕から力が微かに抜ける。

その隙を俺は見逃さない。

大袈裟な音を立てて、地面に倒れてみたりする。

「なッ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・狩屋ッ!?!」

キャプテンが思った通り、心配そうな顔で俺に駆け寄ってくる。

「ゲホッ……ゲホッ……キャ……プテ……」

いかにも苦しそうな声色で呼び掛けてみる。

「大丈夫か？　．．．何があつた？」

ああ、何て扱いやすく優しいキャプテンなんだろう。

「神童……ソイツは……!？」

「  
・  
・  
・  
黙れ、霧野。  
」

鋭い目付きで先輩を睨むキャプテン。

先輩の顔に焦りが浮かぶ。

すっかり立場が逆転した。

「霧野．．．お前、最近可笑しいぞ。」

「違うんだ、神童！．．．ソイツは．．．」

鬼気迫る表情で反論しようとする先輩。

「キャプテン．．．先輩は悪く無いんです．．．俺が、  
悪いんです．．．俺が．．先輩にひつこく質問したから．  
．．．」

「だからって．．．殴ろうとするのは可笑的い！！！」

優しいキャプテン。

俺、あなたのそういうところ大好きですよ（笑）

驚愕と怒りの入り混じった表情で俺とキャプテンを見つめる先輩。

しかし、やがて体を小刻みに震わせてうつ向いてしまう。

「おい、分かってるのか！？霧野、これはれっきとした犯罪――

――もう良い。」

キャプテンの言葉を遮り、俺達の横を走り抜けていった先輩。

しかし、俺にはちゃんと見えた。

海色の瞳が涙で潤んでいたのが。

「……………」

ああ、やっと止まってくれたよ。

少し後味が悪いけど。

「すまない、狩屋．．．．．霧野には俺からきちんと俺から言っておく．．．」

「．．．．．はい。」

キャプテンが俺を気遣って立たせてくれた時だった。

近くで何かがぶつかる鈍い音がした。

1 日目 | 『Day brake』 |

先輩が車に轢かれた。

歩行者側の信号無視が原因だった。

『死ねば良かったのに』

携帯にその9文字を打ち込み、直ぐに消す。

そして、机にうつ伏せる。

勿論、「可哀想な後輩」を演じる為だ。

「大丈夫．．．？．．．．．狩屋．．．．．」

最近、良く聞くその少年の声。

顔を上げると思った通り、彼の姿がそこにあつた。

「松風くん．．．．．」

「昨日の話．．．．．聞いたよ．．．．．」

何時もはまるで、光しか映さない目が珍しく影を落としている。

「止めてよ、そんな顔．．．．．まるで松風くんが被害者みたいだよ．．．．．？」

ハハッ．．．．．と、力なく笑って見せれば彼はますます惨めな顔になる。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「大体、被害者は俺じゃなくて霧野先輩だよ・・・・・・・・車に跳ねられちゃった訳だしさ。」

「でも・・・・・・・・狩屋・・・・・・・・」

優しさに揺らぐその瞳。

それは、まるで――。

「松風くんは何も悪くない・・・・・・・・」

俺の中の何かを揺さぶるようで――。

「悪いのは・・・・・・・・俺なんだから・・・・・・・・」

――ぶっ壊して終いたくなる。

「俺が霧野先輩に気に入られてないから……………」

「……………狩屋は悪くないよ……………!!!!」

ますます揺らぐその瞳に満足し、俺は席を立つ。

「ありがとう……………松風くん。」

さて、花屋にでも寄って『彼岸花』でも買って行こうかな……………  
・勿論。

——先輩にね？

花屋で迷わず彼岸花を買う中学生を見て、店員は何を思ったのか、  
もう一本サービスしてくれた。

「先輩、どんな顔で俺を迎えてくれるかな．．．．．」

一瞬、絶望しきった顔が脳裏に浮かび、思わず笑ってしまう。

「まあ．．．医者から『サッカー部復帰は無理』．．．．．  
って言われたらねえ．．．．．」

———  
そんな

———  
なんで俺なんですか！！？  
———

———  
なんで

あの時の取り乱し様と言ったら．．．．．まるで、前肢をもぎ取られた兎の様だった。

まあ、実際、右足が麻痺して動かないのだから同じ様なものだろう。

「・・・・・・・・・・自業自得・・・・・・・・」

そう、これは自業自得。

自ら飛び出し、轢かれた彼がいけないのだ。

病室の扉を開く。

ツン、と薬品の臭いが鼻を刺激する。

「先輩、足の調子はどうですか？」

勿論、分かっているさ。

わざとだよ、わざと。

しかし、何時まで経っても返って来ない。

疑問に思いながら足を進めると、無論、羽毛布団の一部が盛り上がっている。

「先輩、何、小学生みたいな事してるんですか？」

「・・・・・・・・・・。」

悪魔で布団と同化しているつもりらしい。

・・・・・・・・・・なら、捲ってしまっただ。

バツと布団を勢い良く引つ張る。

スローモーションの様に布団が空中を舞い、そして中に隠れていた先輩が――。

「・・・・・・・・・・あれ？」

何も居なければ、詰め込まれてもいない。

そう、何も居なかった。

「・・・・・・・・・・チツ・・・・・・・・・・馬鹿にしゃがって・・・・・・・・・・」

軽く悪態を着き、彼岸花をベッドに投げ付ければ。

まるで、紙吹雪の様に花弁が布団に散りばめられる。

「・・・・・・・・ん？」

そこで、俺は何かに気が付く。

花束を投げ付けたせいで、僅かに横にずれてしまった枕からはみ出した「D i a r y」と書かれた手帳。

いーもの、見いつけた。

手に取り、ペラペラとページを捲る、が、在るのは真っ白なページ

だけ。

なあんだ、と思いながら手帳を閉じようとした時だった。

「ん．．．．．？」

一瞬、何かが見え、そのページまで戻ってみる。

『屋上』

ただ、その単語だけが書き殴られた、そのページ。

「屋上．．．．．って、自殺でもする気がよ．．．．．」

一瞬、背筋に悪寒が走る。

そうだ、どうして先輩はここに居ないんだ？

トイレだったら、普通、俺がここに居た時間内に帰って来るだろう。

しかも、まだ夕食の時間には早すぎる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

看護師に何かを言われたがそんなの、俺には聞こえていなかった。

閉じかけたエレベーターに駆け乗り、元から乗っていた人達の冷たい視線を無視し、最上階で降りる。

そして、屋上へと続く階段を駆け上がる。

バンツと大きな音を立てたと同時に真っ青な空が目の前に広がる。

「・・・・・・・・・・来たか。」

感情が全く込もっていない、その声。

それは紛れもなく、先輩だった。

「・・・・・・・・何してるんですか・・・・・・・・そんなところで・・・・・・・・」

ちょっと体を傾ければ落ちてしまっただろう、その体勢。

松葉杖がすぐ隣に投げ出されている。

「・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

先輩はクスリ、と笑って見せるが目は全く笑っていない。

「・・・・・・・・いや、お前に良いものを見せてやろうと思っただけさ。」

「良いもの．．．．．?」

「．．．．．なあ、狩屋．．．．．お前、覚えてるか?．．．．．  
．．．お前が初めて雷門サッカー部として試合に出た時さ．．．．．  
」

まるで、何処か遠くを見るような虚ろな目。

「．．．．．ああ、確か俺、先輩の足、踏んだんでしたっけ．．．  
．．．」

「そうそう．．．．．それで俺がキレてさ．．．．．」

その後も長つたらしい思い出話が続き、ますます彼が何をしたいんだか分からなくなる。

「なあ、狩屋。」

ふと、遠い世界から先輩が戻ってくる。

「俺さ．．．お前のこと．．．．．」

『大嫌いだ。』と満面の笑みで先輩は言い捨てる。

「俺も大嫌いですよ、先輩。」

俺も満面の笑みでそれに答える。

強い風が吹き付け、思わず目を閉じ、開けた時だった。

ふらつと先輩が揺れたかと思うと、背中を空中へと投げ出す。

「なっ・・・・・・・・！！？」

すかさず手を伸ばし、彼の腕を掴んで引き上げようとした。

——それがいけなかった。

一度、重力に逆らったモノは落ちるしか無いのだ。

二人の身が完全に空中に投げ出され、地上へと落ちていく。

内臓が後ろに押し付けられるような、曖昧な恐怖。

迫り来るアスファルトの地面。

.

.

.

.

遠くで、何かが潰れる音がした。

2目「Incredible truth」―（前書き）

「Incredible truth」

．．．つまり、「嘘の様な真実」。

2日目『Incredible truth』

眼下に広がる海に飛び込んだと同時に、バシャリと音を立て、水飛沫がキラキラと宙に散った。

眩しすぎて、目が潰れてしまいそんな太陽が気持ちよかった。

——溺れちゃうわよ、マサキ——

そうは言いながら、愉快そうにクスクスと笑う『お母さん』。

——マサキ。どうせなら、世界一周でもしてきたらどうだ？——

悪戯っ子のような表情で笑う『お父さん』。

—— ちよつと、あなた！ ——

—— 冗談だよ、冗談 ——

楽しそうに笑う二人を見て、俺も思わず笑ってしまふ。

・

・

・

・

—— そんな、愛されるのが『普通』だった俺がソコに居た。

—— 起きて

誰かの声がする。

多分、知っているけれど。

知らない声。

—— ちゅ、はやく

まるで、深海から水面へと、身体を持ち上げられる様な感覚。

それはとても懐かしい感覚で。

全てを預けなくなる様な、そんな感覚――。

「豪炎寺先生、……くんの意識が戻りました!!」

「何、本当か？」

周りがザワザワと騒がしい。

「私の声が聞こえるかい? ……聞こえたら、頷いてくれないか?」

黒髪にすこし白髪の間違った、しかし目には強い意思を称えた中年くらいの白衣を着た男が静かに俺に問い掛ける。

頷こうとして頭を傾け様とした時、何故か身体が上手く言うことを聞いてくれない。

どうにかして頷くと、豪炎寺と呼ばれたその男は安堵の表情を浮かべる。

「峠は越えたようだ……一応、後で精密検査をさせてもらうよ。」

男はそう言い残すと、俺の視界から消えた。

——ここは、何処だ？

まず、最初に浮かんだ疑問はそれだった。

確か、病院の屋上に出たところまでは思い出せる。

その後を思い出そうとすると、まるでハンマー殴られたかのような痛みが頭に走る。

そうして、俺はまた、意識を手放したのだった。

次に起きた時。

そこには見慣れた顔があった。

灰色のウェーブがかった天然の髪。

ついさっきまで泣いていたかのように潤んだ黒い瞳。

キャプテン、と言おうとして口を開くが喉が砂漠の様にカラカラで声が出ない。

そんな俺に気が付いたキャプテンは目を見開いたかと思うと、視界から消えてしまった。

「こつちです！豪炎寺先生！」

叫ぶ様な、今にも嬉しさに倒れてしまいそうなキャプテンの声。

「やあ、調子はどうかね？」

見覚えのある白衣の男性。

首元を指で押したり、聴診器を俺の胸に当てたりして、一通り終わると言った。

「もう大丈夫だ、心配ない。」

「良かった．．．．．本当に．．．．．良かった．．．」

いまいち、俺が状況の分からない事を察してかキャプテンは続けた。

「お前、屋上から落ちたんだぞ――？」

屋上から．．．．．

そこでやっと、俺は全てを思い出す。

――そうだ、確か霧野先輩を引っ張ろうとして．．．．．

「では、私は行くが．．．何かあったら何時でも言ってくれ。」

「本当に、ありがとうございました．．．！――！」

深々と先生に向かって頭を下げるキャプテン。

やがて、出ていったのか扉の開く音がした。

取り合えず、整理しよう。

俺は屋上から落ちた。

そして、話の流れからして暫く昏睡状態になっていたらしい。

で、今の状態である。

とりあえず、起き上がろう。

そう思つて腹筋に力を入れると普通に起き上がった。

どうやら、身体はもう動けるらしい。

頭の痛みも引いている。

「もう、起き上がって大丈夫なのか？」

何時もより、どこと無く自然な感じのキャプテン。

大丈夫です、と言おうとして口を開くが声が出ない。

「あ、水が欲しいんだな？取って来るからちゃんと寝てろよ？」

そういつてキャプテンは病室の外に出て行ってしまふ。

．．．．．へえ、優しいですね。

ふと、自分の腕が視界に入り、何時もより白い事に気が付く。

更に、血の気が引いているのか少し青白い。

暫く、外に出てないからか．．．．？

でも、暫くって言うても一週間も経ってないよな？

何で、色々考えていると不意に首筋が冷やされ、思わず震える。

「お待たせ、自販機がなかなか見つからなくて．．．．．しかも、財布に御札しか入って無くてさ．．．．．」

何ですか、その金持ち発言。

これだから、お坊っちゃまは．．．．．と、思うが決して表情には出さないで笑って見せる。

すると、何故かキャプテンはまるで、宇宙人に会ったかの表情になる。

「．．．．．何時もみたいに．．．．．呆れない．．．．．のか？」

呆れる？

俺、そんな『演技』、キャプテンにしたっけ？

「まあ、まだ寝ぼけてるんだな．．．．．水、冷たい内に飲んだ方が良いぞ？」

キャプテンに促されるがまま、俺はペットボトルの蓋を開け、冷たいそれを口に運ぶ。

喉が潤っていく感覚。

水がこんなに有難いって思ったのは初めてかもしれない。

相当、喉が渴いていたのか直ぐに一本、飲み干してしまう。

「良い飲みっぷりだな。」

隣でケラケラとキャプテンが笑う。

その顔があまりにも自然過ぎて、少し疑問に思う。

「あ．．．．．の．．．．．」

まだ、喉が馴れてないのか若干、空気が漏れ、別人の様な声になってしまう。

「どうした？」

相変わらず、まるで親しい仲であるかの様に話すキャプテン。

「なんで．．．．．おれのほうに．．．．．きた．．．．．んで  
すか．．．？」

思わず、ずっと思っていた質問を投げ掛ける。

「当たり前だろう？」

キャプテンは当たり前であるかの様に言った。

「『親友』なんだから。」

「あつ……………」

空になったペットボトルが手を滑り抜け、床に落ちてしまう。

「もう…………気を付けろよ…………まだ寝ぼけてるのか？」

笑いながら、彼は床のペットボトルを拾う。

なんだ、この人。

親友って、意味分かって言ってる訳？

「……………どうした？」

目の前で笑うキャプテンが未知の生物に見える。

親しい友って書いて親友って読むんですよ？

ほら、何時も隣にいる様な存在――

――先輩だ。

キャプテンの親友って言ったら霧野先輩くらいしか思い浮かばない。

なのに何で――。

．．．．．嫌な予感がする。

全身に鳥肌が立つくらい、嫌な．．．．．

『ドクンッ！』

心臓の鼓動が聴こえる。

ゆっくりと、首をすぐ隣の窓ガラスの方へと向ける。

薄桃色の髪。

一般の肌より少し白い肌。

猫の様な、海色の――。

・

・

・

俺の中の何かが弾け飛んだ。

3日目「『子守唄は猫を誘う』」

豪炎寺医師は患者である少年、『霧野蘭丸』の呼吸、心拍数が安定したのを見て安堵の溜め息を漏らす。

そして、隣で今にも泣きそうになっている少年に言った。

「大丈夫、軽いパニック状態になっただけだ……今は薬で眠ってる。」

よっぽど、大切な親友なのだろう。

神童少年は目を輝かせて私を見る。

「本当ですか？」

「医者に一言は無いよ。」

「それ、『男』ですよね？」

「医者も男も同じ様なものだよ。」

そうですか？と、言いながら笑う少年を見て此方まで笑顔になってしまう。

と、同時に海外公演の疲れが眠気になまって押し寄せる。

「・・・・・・・・あの・・・・・・・・豪炎寺先生・・・・・・・・」

「何だい？」

「霧野の足．．．．．本当に良かったんですか？．．．．．お金は要らないって．．．．．」

ああ、その事か。

「あの医療はまだ、日本では許可が出てないものなんだ．．．．．簡単に言えば『犯罪』なんだよ。」

「．．．．．えっ!？」

目を見開き、あたふたする彼。

「だから、これは私と君と．．．．．彼だけの秘密だ。」

「はあ．．．．．。」

「．．．．．それに、完治したとしても『歩く』事は可能だが、  
『走る』のには多少、支障がでるかも知れない．．．．．」

．

．

．

「．．．．．それでも！」

彼の声が若干、大きくなる。

「それでも．．．．．霧野がまた、サッカーを出来る様になれ  
るなら．．．．．」

．．．．．その時の彼の目は、まるで。

あの時、私の息子のサッカーを守った、太陽の様に輝く少年の目とそっくりで。

「・・・・・・・・イナズマイレブン・・・・・・・・か・・・・・・・・」

「・・・・・・・・え？」

「いや、ただのおじさんの一人言だよ・・・・・・・・」

豪炎寺は笑いながら、その病室を出ていった。

なあ、修矢。

この時代のサッカーは、

—— 本当に管理が必要なのか？

「．．．．霧野．．．．」

彼の名を呼ぶ。

しかし、聞こえてくるのは規則正しい呼吸だけだった。

しかし、神童は続ける。

「・・・・・・・・なあ、霧野。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・お前、小さい頃から一人で抱え過ぎなんじゃないか？」

「・・・・・・・・・・。」

「俺の相談には乗ってくれるのに、自分の相談は誰にも話さないで背負い込む・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「お前は神様でも何でも無い、俺と同じ人間なんだ・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「それは、お前は人に頼るより、頼られる方だから、はっきり言って話していくかも知れない。」

「・・・・・・・・・・。」

「けれど、たまにはさ・・・・・・・・誰でも良いから、全て吐き出してみても良いんじゃないか？」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・なんてな、泣き虫キャプテンからの助言でした。」

「・・・・・・・・・・。」

神童は一通り話し終え、フツと息を着くと立ち上がる。

「じゃ、また明日な。」

荷物をまとめ、ドアが開き、そして閉じる音がした。

.

.

.

.

「・・・・・・・・何が、一人で背負うんだよ。」

一人悪態をつく少年。

「偽善者が。」

さてと、ではまた整理をしてみよう。

霧野先輩は何でも一人で背負ってしまうらしい（笑）

キャプテン。たぶん、それ、「おせっかい」の間違いですよ。

だって、あの霧野先輩ですよ？

一人で背負い込むどころか、背負い込みたがりそうな霧野先輩ですよ？

どうせなら、ギリギリまでパンパンになって、ドカーンって爆発するくらいに背負い込んで自滅すれば良いさ。

．．．．．と、下らない話しは置いておくとして。

「．．．．．俺がその、霧野先輩になってるって．．．．．  
．．．このマンガの話だよ．．．．．」

全く、冗談にも程がある。

入れ替わりものなんて、今の時代で売れるわけないだろ、と仕組みだ奴に言ってやりたい。

なんて、軽い口を叩いてる程の余裕も俺には無い。

「．．．．．わけ分かんねーよ．．．．．」

頭を抱えたくなるのも当たり前だ。

．．．．．取り合えず、考えよう。

今の俺は霧野先輩である。

と、言うことはだ。

普通に考えたならば、霧野先輩が俺になっていることになる。

なんだ、なら話は早い。

会って、適当な対処をすればいい。

殴るなら殴る、蹴るなら蹴る、殺るなら殺る。

あらま、意外に簡単だ。

これなら、どつかのガキ大将に頭が上がらない、猫型ロボットにベツタリな眼鏡のバカでも出来るんじゃないか？

．．．．．いや、出来ないか。

まあ、良いや。

とにかく、そこら辺をウロウロしてる看護師に『狩屋マサキ』。つまり、俺の病室を聞けば一発で案内してくれるだろう。

「……………って、確か右足がダメになってたんだっけ？」

近くに用意された松葉杖を発見し、どうにか上手くバランスを取る。

初めてにしては上出来じゃね？と自画自賛をしながら、病室を出る。

が、どうした事か。

看護師が一人もいないじゃないか。

「マジかよ……………」

何、皆そろって集団トイレですか？

はっきり言って、それ許されるの中学生までだと思うよ、オバ様方。

「……………取り合えず、ナースステーション探そ……………」

仕方なく、オレはその金属で出来た重い重い松葉杖を付き、長い廊下を進み始めた。

.

その時のオレは知らなかったんだ。

先輩の言葉の意味を。

本当なら知ってはいけなかったんだ。

一生。

永遠に。

永久に。

絶対に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1333x/>

---

無音空耳狂想曲をバケツを被った猫に捧げる

2011年11月12日21時54分発行